

平成 30 年度日本文学科 フィールドワーク報告書

原 卓史・小畑 拓也・塚本 真紀

1. はじめに

平成 30 年 10 月 6 日（土）～8 日（月）にかけて、日本文学科フィールドワークを実施した。今回は「横浜フィールドワーク」と題して、神奈川・東京方面での調査研究活動を行った。本報告書では平成 30 年度日本文学科フィールドワークの行程や事前・事後学習の内容、フィールドワークにおける調査研究（研究・創作）の成果を記述する。

2. フィールドワーク参加者

日本文学科フィールドワークは、芸術文化学部日本文学科専門教育課程の関連科目（3 年次開講の選択科目、単位数 2）として開講されているものである。今年度の履修者（3 年生）は 24 名であった。加えて 4 年生 6 名と、科目担当教員 3 名の合計 33 名がフィールドワークに参加した。

3. 事前学習

近現代文学・古典文学領域からの研究アプローチ、フィールドワークにおける注意点について、合計 4 回・5 コマにわたる事前学習を計画した。ただし、7 月 18 日（水）5 限目に第 2 回事前学習として予定していた藤川功和教授による講義は、西日本豪雨後の長期断水による影響で開催することができなかった。

今年度の科目担当教員である原卓史准教授は、6 月 19 日（火）5 限目に、近現代文学領域の研究事例を交えながらフィールドワークの目的と調査研究テーマの設定法に関する講義を行った。8 月 1 日（水）～3 日（金）の 5 限目には、フィールドワーク調査法として、文献調査、聞き取り調査、画像・

スケッチ収集の3種を紹介し、そのためにどのような事前準備や詳細設定が必要かを具体的に説明した。あわせて、地図上にルートを示しながらフィールドワークの具体例（横浜エリア、川崎エリア、鎌倉エリア、東京エリア）を紹介した。これらの事前学習をもとに、参加学生は各自の調査研究テーマにあわせたフィールドワーク個別計画表を作成・提出した。提出された個別計画表へのコメントというかたちで原卓史准教授から個別の指導が行われた。

10月3日（水）5限目は、科目担当教員である塚本真紀教授と小畑拓也准教授が事前学習を担当した。今回のフィールドワークは、参加学生の個別計画に基づく活動が主となるため、それらの個別計画の概要を一覧表にまとめ参加者全員で共有した。かつ電子メール一斉送信で定期的に活動報告を行うというかたちで活動中の様子も全員で共有する予定であることを伝え、活動報告の具体的な方法を説明した。最後にフィールドワーク当日までの最終の準備・確認事項を説明した。

4. 行程

（1日目）平成30年10月6日（土）；移動と団体行動（神奈川近代文学館、横浜中華街等）

- 9:36 新尾道駅を出発。途中岡山駅でのぞみ号に乗り換え新横浜駅・桜木町駅を經由し石川町へ移動した。



写真1： 神奈川近代文学館前で観覧終了後に記念撮影

- 横浜中華街を散策しながら徒歩で神奈川近代文学館へ移動した。桜木町駅・石川町駅のコインロッカーを利用する予定であったが、大きめのロッカーの空きが少なく、キャリーケースを引きながら移動せざるを得ない人もいた。
- 神奈川近代文学館では学芸員による解説をきいた上で、常設展および特別展「寺山修司展 ひとりぼっちのあなたに」を観覧した。
- 港の見える丘公園、横浜外国人墓地周辺を散策した後、川崎駅前の宿泊先に移動した。

(2日目) 平成30年10月7日(日) ; 個別計画に基づきフィールドワーク

2日目の活動については、参加者に一斉送信された活動報告メールをもとに記述する。出発時の活動報告メールから、9:00前に出発した人と10時ごろに出発した人に二分される傾向がみられることがわかった(図1のグラフ参照、大学の授業開始時間が染み付いている?)。

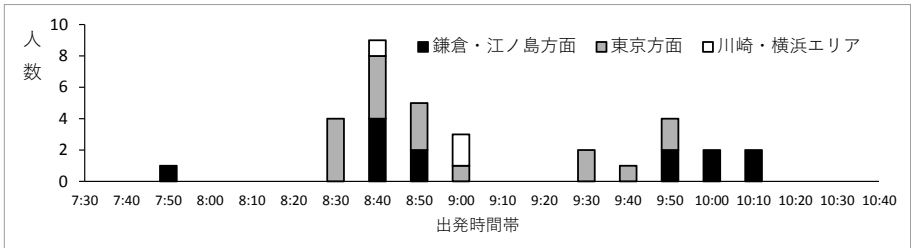


図1 2日目の出発時間帯度数分布

図2は活動中に一斉送信されてきた活動報告メールをエリア別に示したものである。各エリアとも、結果的に行き先が共通しているケースがあったが、調査研究テーマが異なれば観覧の順番・観点も異なるため、グループでの移動を計画していた人同士は別として、参加者同士が活動先で偶然会おうということはなかったようである。

宿泊先に戻った時点で送信する活動報告メールをもとに全員の活動終了を確認した。

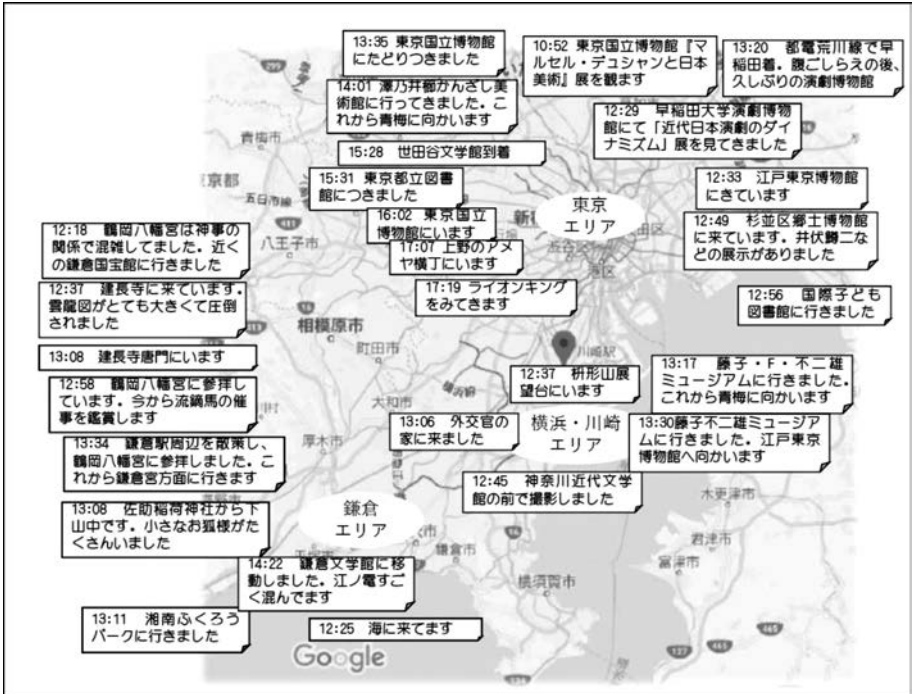


図2 2日目の活動報告メール（エリア別）

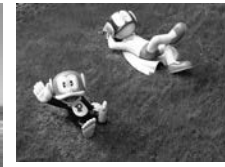


写真2； 2日目の活動報告メールに添付された写真
 上段左から、鶴岡八幡宮、外交官の家、東京国立博物館、
 下段左から佐助稲荷神社、江の島の海、藤子・F・不二雄ミュージアム、早稲田大学演劇博物館

(3日目) 平成30年10月8日(月); 午前は個別フィールドワーク、午後移動

- 3日目の活動については、出発時のメール送信のみを指示していたが、自発的に途中で活動報告メールを送信した学生も多かった(報告内容; 浅草にいます。これから上野に移動します/ただ今オービィ横浜に来ています。これからマウンテンゴリラを見て極寒体験してきます/山下公園周辺を巡っています/神奈川近代文学館に行ってきました。これから中華街で昼食をとります/横浜赤レンガ倉庫にいます。オクトーバーフェストというものがあるみたいです/ゴルゴ13に会ってきました/オービィ横浜を出て、新横浜駅に向かっています。オービィ横浜は、素敵な展示がたくさんあり、とても楽しかったです/鶴岡八幡宮に行き、新横浜駅に着きました。神事がとてもかっこよかったです)。
- 午後の移動を控えての活動であるため、新横浜駅周辺での活動が望ましい、と伝達していたが、実際には時間を有効に活用して東京エリア・鎌倉エリアで活動した学生もいた。
- 帰りは14:29発のぞみ号で新横浜駅を出発。福山駅で乗り換えて18:06に新尾道駅へ到着し解散した。

5. 事後学習と調査研究成果レポート

11月21日(水)5限目に事後学習を行い、フィールドワークの振り返り・提出物の説明を行った。履修学生は事前の調査研究テーマに基づき、研究レポートまたは創作の提出が求められた(11月30日(金)締切)。表1に、提出された創作・研究レポートのタイトルを示した。

6. おのみち文学三昧における報告

平成30年12月8日(土)にしまなみ交流館にて開催された第10回おのみち文学三昧では、フィールドワーク参加者によるパネル発表を行った。「フィールドワークに参加したときに撮影した写真の中から一枚を選び、その写真を紹介する。あわせて、フィールドワークに参加した動機、参加して良かったこと、参加したことをどう研究・創作に生かしたのか、などを紹介する」展示物を各自A4一枚で作成し、エリア別にパネル展示を行った。フィールドワーク参加学生が交代でパネルの展示紹介・質問受け付けを行った。

表1 提出された創作、研究レポートのタイトル

ジャンル	タイトル
創作	『一步』
創作	『星空旅行』
創作	『東京』
創作	(無題)
創作	『おもいでばなし』
創作	『ぼんすけ』
創作	『110-0005』
研究レポート	児童文学史の流れー井伏・石井の活動に注目してー
研究レポート	寺山修司と織田作之助の「嫉妬」について
研究レポート	「江戸東京博物館」における展示工夫ー江戸ゾーンを中心にー
研究レポート	小川糸『ツバキ文具店』～フィールドワークを経て～
研究レポート	映画『陽だまりの彼女』の原作との比較
研究レポート	藤子・F・不二雄作品と「子ども」の存在について
研究レポート	江戸時代の女性たち
研究レポート	阿佐ヶ谷文士・伊藤整
研究レポート	フィールドワーク報告(建長寺、円覚寺、浄智寺)
研究レポート	山東京伝作『江戸生艶気樺焼』考
研究レポート	江戸時代の獣肉食・料理について
研究レポート	『聖徳太子と真名長者伝説』
研究レポート	鎌倉における寺社から見る働きについて
研究レポート	鎌倉寺社の現状ー観光地を意識してー
研究レポート	西洋文化の流入による食変化ー肉食と牛乳の普及ー
研究レポート	読本『飾磨褐布染』内に登場する人物像の考察
研究レポート	『陽だまりの彼女』小説から映画への変化 舞台 江の島を切り口にして
研究レポート	「江戸の火事と命を懸けて戦った男たち」



写真3： おのみち文学三昧におけるパネル展示

7. 横浜フィールドワーク報告会

平成30年12月13日(木)4・5限目に報告会を実施した。創作や研究レポートの紹介、フィールドワークでの気づき・感想なども加えて一人5分程度のスピーチを行った。「作品の舞台となった場所を歩くことであらたに気づいたことが多かった」「3日間ずっと楽しく笑顔で過ごしていた」などの感想が語られた。

8. おわりに

平成30年は日本各地で災害の多い年であり、10月6日(土)も台風の進路を気にしながらの出発となった。運良くスムーズな移動が可能であったことに加え、何よりも参加者それぞれの目的意識と柔軟な行動力により、充実したフィールドワークが展開されたと感じる。団体での移動・活動の際には個人の中に潜在していた探究心が、個別計画に基づきフィールドワークを進める中で顕在化することで、参加学生も教員も、研究・創作・教育上の多くの成果を体感することができたように思う。

付記

神奈川近代文学館での観覧にあたっては、関係者のみなさまに多大な協力をいただきました。加藤れん氏には団体での観覧受け入れに多大なご協力をいただきました。また斎藤泰子氏には施設や展示の詳しい解説をいただきました。記して御礼申し上げます。

(報告書文責・塚本真紀)

—はら・たかし 日本文学科准教授—
—こばた・たくや 日本文学科准教授—
—つかもと・まき 日本文学科教授—